名誉顧問のコモンセンス　1

『報徳記』を読む

二律背反の解決先生 3

忠か、孝か？

忠か、孝か

報徳先生は、「二律背反先生」といってもいいほど、解決不可能な矛盾をはらんだ事件に遭遇します。でも、どんな矛盾に満ちた難問・課題でも、見事に解いて見せます。まさに、「二律背反解決先生」と言って良いほどです。

先生が、まず、最初に困ったのは、藩主の小田原候から、関係する領地のなかでも最も貧村の桜町の復興を依頼されたときでした。そのとき先生は、自分の家の再興と田畑の復興にとりかったばかりでした。先祖に対して復興を誓ったのに、その仕事を諦めなければなりません。「忠ならんと欲するか、孝ならんと欲するか」 ― 二つに一つを選ばなければなりません。これこそ、誠実な者にとって最大の「二律背反」です。

先生、既に小田原侯の委任を受しより倩（つらつら）思惟するに、櫻町采邑の廃衰殆ど亡村に等し。風俗頽廃・奸佞邪曲の民多し。故に如何なる知略の者と雖も容易に之を化することあたはず。昔の者、大禹（たいう:中国古代の国の名君）の有苗（移民族の苗族）を征するに武略・知計を以てせずして、唯、至誠を以て我が身命を抛（なげうち）ち、此の民を安撫せんに何ぞ再興せざることあらんや。然して憂ふべきもの斯に一つあり。予、極貧の家に生まれ孤となり、一家の廃亡を興し、父母組先の霊を安ぜんと欲し、日となく夜となく心力を盡し、其の始め、一苞の米を種として遂に廃家を挙げ組先の田圃を復し、聊か追孝の道を立るに至れり。豈図（あにはか）んや、君公の知を受け、宇津家の采邑を旧復せよとの命

を蒙んとは。今、忠を盡さんとすれば、必ず、此の[我が]家を破り、不孝に陥らんか。孝を全くせんとせば、君命を廃し忠義を全くすること能わず。**古今、二つながら全くするの難きを憂ふること宜(うべ:当然)なる哉** と、胸間を撫して黙慮すること良(やや)久し。

「忠ならんと欲すれば、孝ならず」で、古い昔から宮仕えする者たちの最大の難問です。この難題の解決を考えに考え抜いた末に、先生は覚悟を決めました。

幡然(はんぜん:心をひるがえす)として曰く ― 「嗚呼、何をか憂ひ、何をか惑わん。元来忠孝一道にして二道あるにあらず。**人、至孝なる時は忠、自ずから其の中にあり。至忠なる時は孝も亦、其の中に存せり**。君命を得ざる時は。一家を興し、祖先の祭祀を永く存するを以て孝とせり。一度、君の知を得て百姓を安ずるの命を受くるに至ては、**此の民を安ずるを以て孝とせん**。若し仁君の命を廃し、仮令(たとえ)、億萬の財を積み、一家の繁栄を以て十分の祭祀を盡すといへども、父祖の霊、必ず不孝の子となさんこと明かなり。僅々たる一家を廃し、萬民の疾苦を除き、上君の心を安んじ、下百姓の経営を安んぜば、父祖の本懐何事か之に如んや。一家を全くせんとする時は旧家を廃し、萬家を全くせんとして一家を廃す。豈、同日の論ならん。我れ、心、既に決せり」と。

仁の心に従う

先生は、「忠を行うも、孝を行うも同じだ」と悟ったのです。どちらも、大事なことを実行するのだ。どちらを成功させても、成功させれば満足だ。どちらが大事かと言えば、これも、先生の心の中にある「仁の心」が決めました。「仁の心」とは、「自分のことより他人のことを先にする」です。「多くの人たちの家を幸せにして、自分の先祖の家をあとにするのは当然のことだ」と悟ったのです。先生は、「仁の心」を実践したのです。この覚悟は、一生、つづきました。「二律背反」の難問がいくら出てきたも、先生は迷いません。絶えず、「仁の心」でそれを解決していきました。

直に祖先の墓に詣り、合掌して告げるに前言を以てし、家に帰り妻に謂て曰く ― 「今明、君上に在して予が不肖を棄(すて)ず。命ずるに廃邑を興し、衆民を安んずる事を以てす。之を辞する事、既に三年に及ぶといへども、君之を許し玉はず。止むこと得ずして其の命を受たり。此の如き大業、平常の行を以て成就すべきに非ず。故に、一家を廃し相続の道を捨てて、身命を抛(なげう)ち、勉励せんとす。然れども、之れ婦女子の解する所にあらず。予と共に千辛万苦を盡し、君命を辱めざることを思はゞ共に野州に赴かん。若し、平常の心を懐(いだ)き艱苦を厭うの心あらば今速に去るべし」と。

妻、曰く ― 「異なる哉、良人の言や。夫れ女子一度嫁する時は二度帰るの道なし。是を以て世々嫁を謂て『帰』[「婦」の洒落か]となすにあらずや。生家を一歩出る時に当りて妾の心、己に決せり。良人、水火を踏まば共に踏まん。況や良人、君命を受け大業を成さんとす。是、卑人の幸に非すや。身を捨て、艱苦に甘んずることは何ぞ云ふに足らん。栄利に趨(はし)り、身の安逸を願ふは君命なしといへども欲せざる所なり。良人必ず労(ろう:心配)すること勿れ。共に與(とも)に野州に赴ん」と云ふ。

先生笑って曰 ― 「汝の言、是なり」。

素晴らしい女房ですね。「君命を受け大業を成さんとす。是、卑人の幸に非すや」は凄い言葉です。さすが、(後妻ですが)報徳先生の女房です。それで、３歳の弥太郎を連れ、夫婦そろって地獄のような野州桜町に出かけます。先生、３６歳のときでした。

【2025/03/23　都築正道】